

第三回滑稽俳句大賞応募句概観

八木 健

十句一組の作品群は、いずれも読み応えがあった。平成の滑稽句として「滑稽俳句大全集」に収録され、後世の読者を大いに楽しませることだろう。選を終え、改めて作品を読み返し、私めが最初に 印をつけた句の一部を取りあげて、印象を書いてみた。なぜ 印をつけたのかを思い出しながら。

猪も引き連れ村は市となりぬ 横山喜三郎

猪が出没する「市」が、「町村合併」でたくさんできた。広域行政だ、人件費の節約などと強引に実現したけど、矛盾がたくさん。猪だって吃驚。町村合併を揶揄した一句。

住職のくさめ止まらぬ坐禅会 高須峰生

住職は、警策を手に静々の坐禅会を巡視。あってはならぬことだが、座禅会をぶち壊す「くさめ」の連発。坐禅会の面々は笑いを堪える、冷や汗たらたらのご住職。可笑しくも哀しい。

下ネタにまた盛り上がる焚火の輪 武田悟

シモネタがエスカレートして留まるところを知らぬ。焚火を囲む男たちの卑猥な笑い声が天高く響き、焚火の炎が燃え盛る。真冬の工事現場だろうか。

メキシコの南瓜に噛まる和包丁 安井千佳子

メキシコ対日本。ボクシングか、K-1を思わせるね。日本がメキシコに噛まれている。ハングリー精神があるから、噛み付いてでもチャンピオンベルトを奪うつもりらしい。

暖かき便座で聞くや梅だより 近藤國法

時代の違いだね。暖かい便座でラジオでも聞いて、用足しをしているのだろう。梅だよりを暖かさに裏切り、下世話な便座で裏切り、だから可笑的い。

掘り起こす土偶は巨乳夏来る 倉方稔

巨乳の土偶が土の中から出てくる。それを作業員がとりまき歓声をあげる様子が、眼に見えるようです。「夏来る」の季語が健康的。

東風待たず写メールで飛ぶ紅白梅 伊地知寛

「飛び梅」は、携帯電話で飛ぶ時代なんだ。東風を待たずして、「合格してね」なんてコメントをつけて送るのだろう。伝統破壊が可笑的い。

黒星を一生背負って天道虫 久我正明

お相撲さんの世界は勝敗を白黒の星で表現。その負けの「黒星」を背負って、天道虫は一生を送る。同情の思いは、作者が昆虫の親派だからだろうね。天道虫自身は、ほとんど気にしていないんだが、そこが可笑しい。

滑つたり踏んだり蹴つたり霜柱 工藤素子

霜柱という奴も、考えてみれば不憫な奴ですね。仔細に観察すれば美しい芸術品なのだが、踏みにじられるために生まれてきたようなところがあります。

刃傷も恋も進まず菊人形 金澤健

菊人形の哀しさだね。ドラマに展開がない。展開しようがない。いつも同じ姿勢では肩が凝ります。

姫の眼は笑っていない雛人形 小林さわ子

私も時々そう思うことがある。「官女のひとり目つきするどきひひなかな」という句をつくったことがある。いいところに目をつけましたね。

泥んこの縄張り守るむつごろう 下嶋敏夫

むつごろうは、縄張りを守っているのか。こんな泥だらけの世界を誰が犯すものか。むつごろうの懸命さが、可愛いし哀しい。

重たいと思う氷の水に浮く 安田光子

誰もが一度はそう思ったことがある。しかし、それを誰も句にしなかったこと。

噴水の本懐遂げてくづれたる 横山昌子

擬人化だな。本懐遂げてがいい。必死に天を目指した噴水を、うまく写生しましたね。